

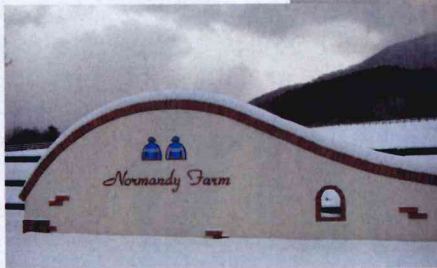


ウオッカの弟、タニノシスターの2011。栗東・昆貢厩舎への入厩が予定されている（写真提供：ノルマンディーオーナーズクラブ）

▶偉大なる母・タニノシスターは、今、オカダスタッド（日高町）にいる。今年もディーブインパクトが配合される予定



◀ノルマンディーファームは新ひだか町豊畑にある。110町歩の敷地を有効に活用し、「頑丈な馬づくり」が行われている



影を終えると、敷地内の屋根付き馬場に15頭ほどが姿を見せた。

始まった常歩を見つめる場長の廣島剛さんに、ぶしつけながら訊いてみたのだ。ブレッシャーはありますか？ と。

「ないといえば嘘になりますよね」

場長は笑みを浮かべた。

「GI馬の弟とか、数々の血統馬をこれまで手がけさせていただきました。でも、あそこまでの良血はいませんでした。あの馬が1頭いるだけで、スタッフの気持ちが引き締まるというのか、いろんな面で気を遣うようになります。我々にとってはありがたい存在なんですよ。」

遅生まれでもありますし、谷水オーナーからも角居先生からも、ゆっくりやってくれと言われてます。3月頃、暖かくなってからペースを上げていく予定です。馬は柔らかいですね。人がまたがると、パネを感じさせる走りを見せますから」

まずは基礎体力をじっくり養い、坂路・フラットコースを併用して、デビューに向けた調教は春先から加速していくようだ。谷水雄三オーナーも角居勝彦調教師も、すでに一度ずつここを訪れたという。

ありきたりな質問にはなってしまうが、期待のほどはどのようなだろう。

「この段階で、ひと言で答えるのは難しいですね。僕らの仕事は、とにかく無事に角居先生の元へ送り出すことです。すべてはそこからですから」

廣島場長は明快に答えたものだ。

取材のあと、谷水オーナーにも電話を入れてみた。質問は同じ、期待を含めた現在の心境を聞いてみたかったのである。

「馬については素人ですから、偉そうには言えません。ただ、大きいだけでなく、歩きを見る限り俊敏さを兼ね備えているようにも感じていますから、今のところ安心していきます。大事なのは、今後どう変わっていくか、でしょうね。」

両親が両親だけに、あの馬はいろんなものを背負って生きていくのだと思います。

ですから、私としては、できるだけことをしてあげたいと考えています」

手にした携帯電話に、明るく頼もしい声が響いた。

## ウオッカの弟は健康優良児

続いて向かったのは、新ひだか町にあるノルマンディーファームだ。ウオッカの弟にあたるタニノシスターの2011（父ディーブスカイ）はここで調教されている。

ウオッカの生まれ故郷であるカントリー牧場が、47年もの歴史に終止符を打ったのは、およそ1年前のことだった。その繁殖部門を引き継いだ岡田スタッドは、過去にマツリダゴッホやスマートファルコンを生産した実績を持ち、関連施設として日高町にオカダスタッドを、さらに育成場としてノルマンディーファームを展開している。岡田スタッドの代表者・岡田牧雄さんは有名な馬主でもあり、関係する馬はすべてここノルマンディーファームで鍛えられている。

「夜間放牧をベースに頑丈な馬を作る。うちの場合、それがすべての基本になります。あとは馬にあわせて、馬本位の調教メニューで進めていくよう心がけています。」

クラブの馬も基本は変わりません。とにかく数を使いたい。レースをたくさん走らせて、頑丈な馬づくりをしているんだなってお見せしていきたいと考えています」

そう話す岡田壮史さんは岡田牧雄さんの三男にあたる。

今、「クラブ」という言葉が出た。

先に名をあげた3牧場が主体となって、実は新たにクラブ法人を立ち上げたのだ。名をノルマンディーオーナーズクラブという。その愛馬会法人の代表を岡田壮史さんが務め、一方の馬主法人の代表には兄の岡田将一さんが就いている。

初年度募集は20頭のラインアップになった。その目玉と言って差し支えないのが、タニノシスターの2011なのである。

「今、1歳馬は90頭ほどいます。10月に馴致を始めて、11月に乗り始めたグループに

ウオッカの弟も入っています。順調ですね。5月26日の遅生まれにしてはしっかりしていますし、熱発や脚の腫れなど、まだ一度もありません。とにかく体質がいいんですよ。これほどの健康優良児なら、まず走ってくれるんじゃないかなって思ってます」

岡田壮史さんの説明を聞きながら馬場に目をやれば、ちょうどタニノシスターの2011が入ってきた。雪で視界が悪く、動きの細かな部分までは把握できないが、ウオッカの2011共々、調教が順調に進んでいるのが何よりではないか。

ノルマンディーファームの若駒には、今、1日およそ2000回の運動が課せられている。馬場を1周半して坂路を1本駆けると、ほぼこの距離に達するという。馬に余力を感じる時には、坂路の本数はさらに増える。

「過大評価している側面はあるかもしれませんが、それくらい期待を持たせる血統背景と馬体の持ち主なんです。走ってくれないと、この胃がゼツタイ痛み始めるでしょうね」

言って、岡田壮史さんは目を細めたのだ。

続けて、日高町のオカダスタッドにも足を運んでみた。タニノシスターに会うためだった。

19歳を迎えた2012年はディーブインパクトとの配合が試された。だが、残念にも受胎に至らず、次のシーズンに備え、今は英気を養っている。2013年は再びディーブインパクトとの配合が予定されている。

丘の上の放牧地からは冬の海が一望できた。海原に広がる光景に目をこらせば、2014年のダービーではないのか。

ウオッカの血がどこまで広がるか、それは誰にもわからない。ただ、血の広がりを思っただけでわくわくする瞬間こそが、ブラッドスポーツと呼ばれる競馬に特有の、ほかの競技にはない楽しみのはずだ。

ウオッカの2011、そしてタニノシスターの2011。

筆者の夢想の中で、両馬は今、府中の直線をたしかに併走している。 ■